

2010年5月16日(日)

## Plunging a Hole into the Ship's Bottom

船底に穴を開けて、、、



写真:トール・ハイエルダール博士夫妻、我が家にて

2005年8月29日に発生したハリケーン・カトリーナによる災害は未だに私達の記憶に鮮明に残っています。

ニュー・オーリーズ市では、高潮によって排水路や運河の堤防が50箇所以上決壊し、米国の歴史始まって以来の工学的災害を引き起こし、ニュー・オーリーズ市の80%が浸水しました。

世界中の人達はその残骸を見ようと注目し、自分の目を疑いました。死体は市街に横たわり、依然として冠水が引かない場所では死体が浮いていました。たくさんの死骸の腐敗が進んでおり、中には回収まで何日間も水中あるいは天日にさらされて放置され、検視官の多数死体確認作業の妨げとなりました。ハリケーン・カトリーナの余波で、略奪、暴力その他の犯罪が深刻な問題となりました。

その後の5年間、ニュー・オーリーズおよびメキシコ湾岸州の人々と地域社会は自分達の生活と社会を取り戻すために多大な努力をしてきました。観光客が戻り、漁民は漁で利益を上げ、経済は回復し、ニュー・オーリーズ・セインツはスーパーボウルで勝ち、ニュー・オーリーズは再び活動し始めました。しかし、極限の恐怖と不安感は、2010年4月20日イギリス石油会社ブリティッシュ・ペトロリアム社(以後BP社)のメキシコ湾原油流出事故によって再びやってきたのです。

海底1,500メートルの深海油井に端を発する原油流出の量は推定1日21万米ガロンに及んでいます。この量は米国の歴史上ワースト災害として記録されている1989年エクソン・バルディーズ号石油流出事故を上回るものです。専門家は、流出した油が湾の沿岸に伸びていることから、湾岸地区の漁業や観光産業、また、数百種におよぶ鳥類の生息地にダメージを与え、結果的に環境災害になるのでは、と恐れています。私は最悪の結果を予測していますが、現実には私の予測通りになりつつあることを心配しています。

何故、ニュー・オーリーズ及び周辺地域での生活が比較的短期間で回復できたのかを考えてみましょう。湾というものは元来、多様な鳥類、水生動物及び人間が一体となって作るエコシステムなのです。そんな複雑な仕組みはまた微妙にバランスが保たれてもいるのです。繰り返されてきた不運な歴史にも拘らず、ニュー・オーリーズは天然資源の富に恵まれてきました。しかし、そのような環境の中で先祖達がお互いに協力しながらこれまで持続的に生活してきた基本的なビジョンと英知を、私達は失ってしまったのです。そしてこの豊富な資源なしでは都市の早い復活は可能ではなかったのです。

アメリカは天然資源に多大な恩恵を受けてきました。その資源は先祖から無償で引き継がれたものではないのです。アメリカ先住民達は自然と協力する知恵を代々伝えてきました。政府は次世代の人達のために公共財産として国立公園の境界線を引きました。また、ジョン・ミュアは、自然保護とエコシステムや資源の責任ある利用を促進するため1892年にシエラ・クラブを設立しました。益々有害問題が増大する局面でも、その環境保護主義の精神は生きているのです。

60年ほど前の1947年、ノルウェーのトール・ヘイエルダール博士はコンチキ号を率いて太平洋8,000キロを探検航海しました。その後1969年のラー号の探検では海洋汚染のサンプルを採取し、当時の国連事務総長ウ・タント氏に所見を添えて手渡しました。彼の太平洋汚染発見によって国連環境計画構想が出来上がったのです。当時、太平洋はいつも青くきれいで、洋上の島々は永遠の楽園であると考えられていました。ヘイエルダール博士は現代の環境運動の骨組み作りに尽力しました。私の記事「[環境グローバル思考への針治療的取り組み](#)」  
["Acupuncture Approach to Environmental Global Thinking."](#)の中で彼の仕事について言及しています。

最近10年間で環境問題に関する私達の知識や認識は大きく改善されましたが、環境害の方

も深刻さを増しました。私達の祖先は天然資源の豊富なエコシステム網を残してくれました。私達は子孫に、魚や鳥の生息数が深刻な危機にさらされた世界を残そうとしているのです。私達は協力し合って生きているのではなく、逆に捕食者として生きています。バランスの必要性を無視すると、私達は次世代の人達をより難しい立場に追いやることになるでしょう。地球の利己的な店子になることによって私達は自分自身の生活をより難しくしてもいるのです。ニュー・オーリーonzの人達はこのことを大変よく知っています。

私達は、経済を発展させ種として繁栄するためにビルを建築し、産業を育成し続けなければなりません。しかし、これは大きな絵のほんの1ピースにしか過ぎません。私達は地域社会の発展や国民の健康増進、自然環境の責任ある利用の促進にも焦点を当てなければなりません。繁栄という概念は、産業革命を通じて私達を駆り立ててきた金銭的、物質的富だけに限らず、これら全ての局面を含むように拡大されなければなりません。数週間前のBP社原油流出のような災害はこの点を喚起してくれます。もし私達が国民の健康改善やそのエコシステムの健全化のために働かないのだとしたら、努力して稼いだお金を楽しむ人はいるでしょうか。

ジョン・ミュアーやトール・ハイエルダールの意志を継いで、アースデー・ネットワークや国際ミドリ十字および全ての環境グループは、地球との責任ある契約について啓蒙し、感謝の気持ちを抱かせるべく努力を続けるべきです。私達は天然資源を収穫し続ける以上、地球の責任ある店子として数百万の種と共存して行かなければなりません。

私達は地球上の全ての種と共にノアの箱舟に乗っていると考えられます。しかし今回は、人類が海の富を求めて欲張り、船底に穴を開けているのです。